環太平洋乳幼児教育学日本支部
PECERA JAPAN

『多様な子どもが存在しても楽しい保育を実現したい』

～インクルーシブな保育～

玉川大学　若月芳浩

インクルーシブな教育・保育とは?

- 別にしたものを一緒にする概念の排除
- 個々の子どものニーズを読み取る保育
- 読み取ったニーズに応える保育
- させる活動から参加の喜びを感じることが出来る保育
- 仲間と共に生活する喜びが日々感じられる保育
- 模倣から始まり、自立へ向かう保育

重要な役割を担う園

- 多様な子どもを受け入れる事と、保育者及び園の運営に携わる人の専門性
- 就学前に終わるのではなく、就学後や将来にかかわる幼児期の体験の大切さ
- 他人任せではなく、園として責任を持って取り組む必要性
- 連携が出来ない、人が足りないでは終わらない、これからの工夫

保育のあり方の検討と課題(例)

- 障害のある子どもが存在すると保育が出来ない
- 障害のある子どもがいると行事が出来ない
- 障害のある子どもがいると保護者から冷たい視線がある
- 障害のある子どもがいると、日々の保育が止まってしまう
- などの問題を抱えている園が多くあります

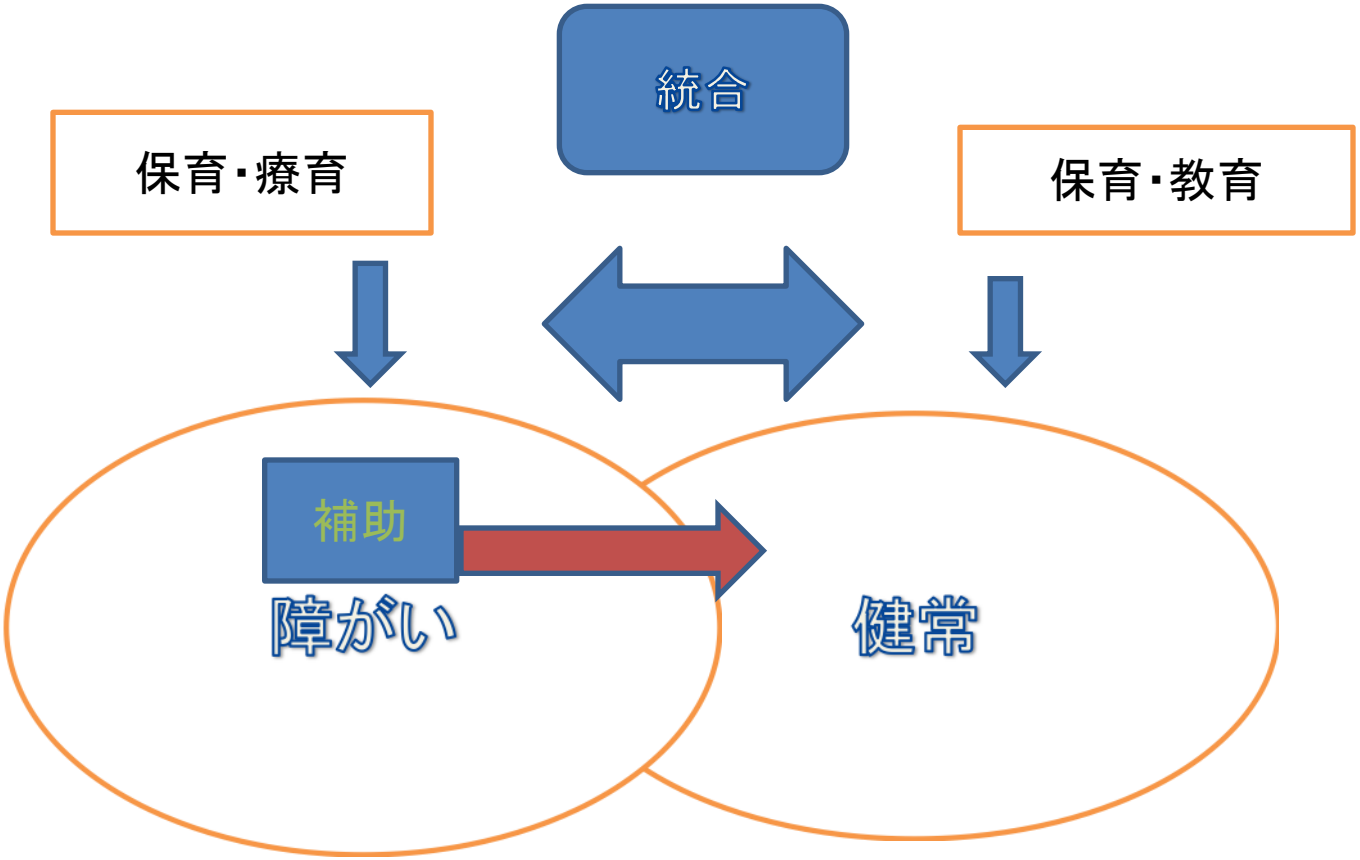
それは障害のある子どもの
問題なのだろうか?

園の保育のあり方や乳幼児の理解と対応に問題があるのではないだろうか?
この検討から出発し、四季の森幼稚園の保育を見直し、研究を深めてきた経緯があります。

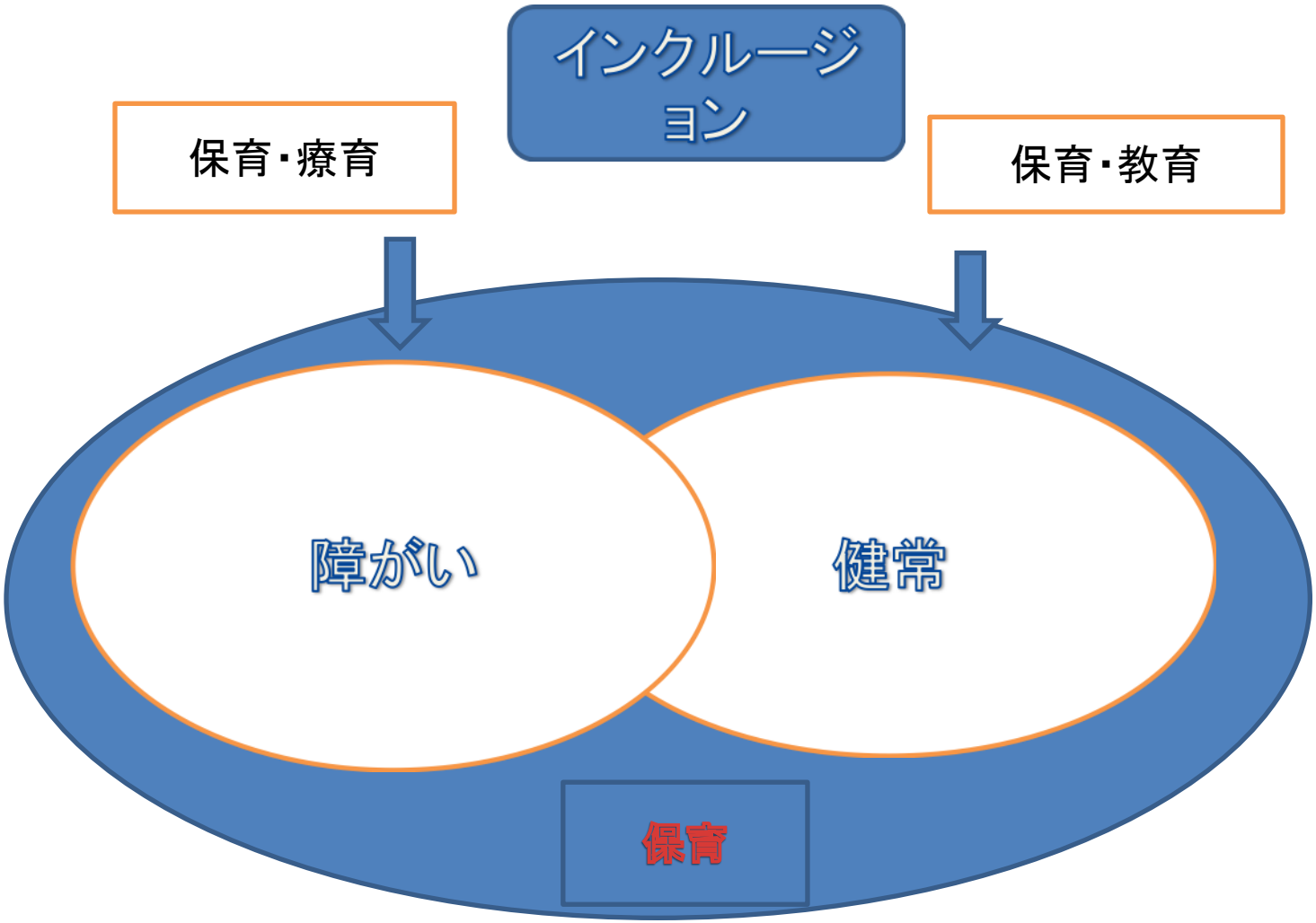
四季の森幼稚園の
教育・保育の質的向上への苦悩

- 普通に実践されていた分離保育の実態
- 特別な人として障碍のある子どもを受け入れていた実態
- インクルーシブなかかわりや思いを意識しなかった教育・保育の姿
- 受け入れてあげる、育ててあげる、個別性の高いかかわりと育ちの阻害
- この7年程度でインクルーシブな教育・保育の実現へ

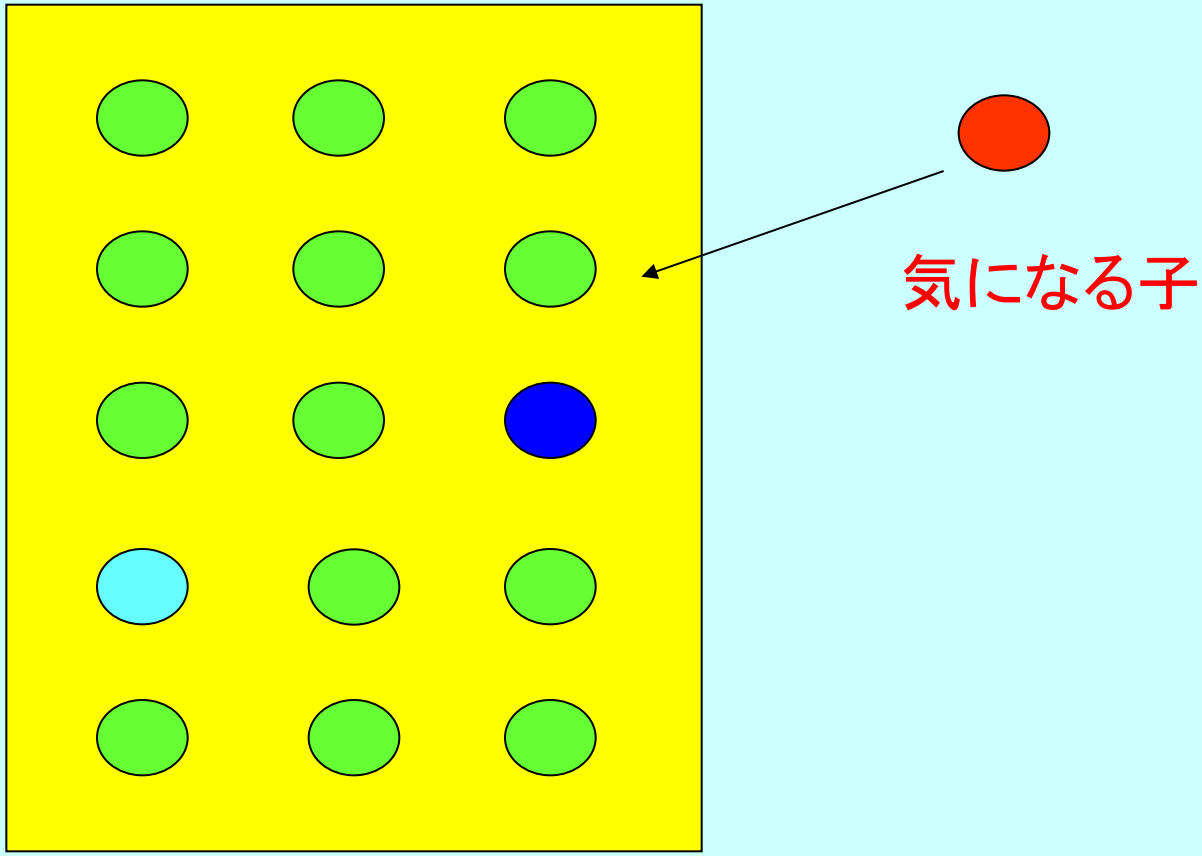
統合保育における分離



障がいのある子どもが存在することが当たり前の園生活



多様性を受け入れる教育・保育のイメージ



障碍のある子どもと保育の質的な関係

- 一人一人の特性や個性が受け入れられる保育のあり方
- 子どもの主体性が十分に発揮される保育
- どの子どもにとってもクラスに居場所がある保育
- 加配と担任の連携が巧みに出来る保育
- このような事が実現出来ることがインクルーシブな教育・保育につながる

インクルーシブな保育と子ども主体の保育

- 子ども主体の保育を実現する事と、障害児保育の実現は多くの関係があります
- 個々の特性が受け入れられる保育
- 非認知能力や社会情動的スキルが高まっていく保育
- 遊びの中にある学びを読み取る事と、学びのプロセスを読み取り、記録し、発信する
- 日々の保育の省察を積み重ね、保育を見直す方向を検討する事

理解と保育は一心同体

- 理解なくして保育を考える事は危険
- 理解は完璧には出来ないが、多様な解釈が必要になる事が多い
- 他の先生方と対話をする事によって、新たな視点が生み出され、理解が深まる可能性がある
- 理解出来ない時にはどのような手法で理解を深める事が可能になるか　⇒　かかわりによる理解

理解の視点を考える

- 理解とは何か
- 障害特性からの理解　障害の知識
- かかわりによる理解　実践知
- 保育は両面から理解する事が必要
- 理解出来ない状況が起きた場合に、理解の手立てを園として検討する必要性
- 第三者的立場の先生に動画や写真を撮影してもらい、保育者同士で対話の時間を持つ

ICTをフルに活用した連携

- 教職員間の連携　Slackの活用
- 保護者との連携　キッズノートの活用
- 週日案などの簡略化と保育者相互の対話
- 会議の削減　⇒　しかし連携は豊かに
- 多様な子どもの姿を写真や動画で共有
- 日々の姿を確認する中で笑いが生まれる
- 園全体で子どもを見ることが実現
- 担任以外の保育者の巧みな役割

共生社会の形成に向けて

- 多様性を当たり前に受け入れる社会構造の醸成に向けて
- 障碍のある子どもを持つ家族が安心できる仕組み
- 障碍のある子どもが存在していて良かったと思える園作り
- 障碍のある子どもと周囲の子どもの関係が作り出す共生社会の担い手としての園作り

研究としての視点

保育学研究　第62巻　第3号　(2024)

- 『私立幼稚園におけるインクルーシブ保育の実態 —保育経験年数別にみるインクルーシブ保育の困難感— 』守 巧・若月芳浩
- フォーカス・グループ・インタビューを実施した。逐語録からSCAT分析をした。経験年数によってインクルーシブ保育への捉え 方や実践など、困難と感じる観点が違っていた。また、経験を蓄積することで保育実 践が熟達化し、困難が軽減するといった単純なものではなく、新たな視点を獲得する ことで生じる困難もあった。今後の保育の質的な向上を含めた多様性のある子どもをあたりまえに受け入れる事が可能となる方向性を示した。
- JSPS科研費19K02653「我が国におけるインクルーシブ保育の定義と実践モデルの開発

実践と研究における今後の課題

- 保育の中で育つ障害のある子どもの姿の見えるかと社会的なアピール
- 児童発達支援事業と保育の連携　現状課題
- 医療・療育・保育の互恵的連携協働の課題
- 解決の道のりは遠いかも
- 私的研究課題　定型発達の幼児におけるインクルーシブな保育の価値の明確化(科研)
- 園児募集の困難さと障害のある子どもの増加　この点が各地で課題となっている

多様性を当たり前に受け入れる園文化と社会の醸成を目指して

- エクスクルーシブな状況の是正
- 養成校での学びと実践の乖離を少しでも軽減させる園の保育の質的向上
- 保護者や家族が安心して入園、就学を迎える事が可能となる地域社会
- 就労に対する具体的な支援と安心感
- 乳幼児期からの共生が何よりも重要

共生社会を目指して
保育の質的な向上を。

多様性を当たり前に受け入れる事
が可能な園を目指して。

ご静聴ありがとうございました。